

ベトナム如清使范芝香の 『鄱川使程詩集』に見える清代中国の汪喜孫

夫馬 進

—

中国清代の乾隆年間から道光年間を生きた汪喜孫は、彼自身が考証学者として知られるだけでなく、彼が同時代の朝鮮の学者と主に書簡を通じてではあるが親密な交際をしていたことも、藤塚鄰が明らかにして以来、知られるところである¹⁾。藤塚は汪喜孫が朝鮮の金正喜ら計6人に送った書簡として、合計28通を紹介している。合計28通とは、藤塚が紹介したところの考証学者であった翁方綱以下、清朝の学者のうちで朝鮮知識人と交際があった者の中で飛び抜けて多い。さらにこれらはたまたま藤塚の手元に集まったものにすぎないから、この収集に漏れたものを含めるならば、汪喜孫が実際に朝鮮の知識人たちに書き送った書簡は、何通に上るのであろうか。今後の研究の進展によって、彼よりもさらに多くの書簡を朝鮮の知人に送った中国人が発見される可能性はなお残っているが、その場合でも汪喜孫が書簡を通じて親密な交際をしていた清朝知識人の一人であったとする評価は、全く動かないであろう。

汪喜孫の著作については、近年、『汪喜孫著作集』全3冊が出版され、彼が書いた詩文のみならず、彼にかかわる文献についても容易に接することができるようになった²⁾。ここでも藤塚がすでに紹介した「海外墨

¹⁾ 藤塚鄰『清朝文化東伝の研究—嘉慶・道光学壇と李朝の金阮堂—』（東京、国書刊行会、1975）頁403～433。

²⁾ 楊晋龍主編『汪喜孫著作集』（台北、中央研究院中国文哲研究所、2003）。

縁」、すなわち藤塚の考証によれば朝鮮の金正喜と中国の汪喜孫との間で
交わされた学術にかかわる問答が再録され、さらにこの書の導言と編集
後記でも、彼が朝鮮学者と交流したことが特筆されている。

この汪喜孫と朝鮮知識人との交流にかかわる史料としてこれまで紹介
されてきたのは、主に彼の書簡および「海外墨縁」だけであったが、筆
者はさらに朝鮮の申在植が燕行使として北京に滞在したおり、汪喜孫ら
数人の清人と会合をもち、その席で交わした筆談記録である『筆譚』を
紹介しつつ、汪喜孫 42 歳の言行の一端を示した³⁾。申在植は 1827 年（道
光 7 年、純祖 27 年）の正月に合計 4 回、清朝知識人と会合をもったが、
汪喜孫はそのうちの 3 回に出席し、その人となりを示す多くの発言を行
っている。会合では様々な学術的な問題をめぐって筆談が交わされたが、
これに参加した清朝知識人の発言の中で最も異彩を放っているのは、汪
喜孫その人のものである。彼は様々な学術情報を申在植に提供し、また
漢学と宋学の両方とも捨てるべきではないとの立場に立って、漢学を不
要とする申在植に説得を試みた。さらに官僚としての自戒までも披露し
ている。すなわち、もしも官僚としてあるまじき不正を自分がするよう
なことであれば、「雷よ、わが身を撃て、火よ、わが家を焼け」と関帝
廟や城隍廟で黙祷したことがある、との自戒まで告白しているのである。
筆者にとって汪喜孫とは、考証学者として有名であった父汪中を異常な
までに顕彰するなど、様々な点においていささか奇異な感を懐かせる人
物ではあるが、一面で、前近代の中国にあっては極めて稀なタイプの「国
際人」の一人であった、と評することができる。

汪喜孫がこのように朝鮮知識人と親密な交際をしていたことは、かつ
てにまして今や明らかになったと考えるが、一方、彼がまたベトナム使
節とも交際があったことについては、これまで全く知られてこなかった
ようである。『汪喜孫著作集』に収録された史料をはじめとして、これま
で紹介された彼にかかわる文献においては、彼がベトナム使節と交流し
たという痕跡は一切見あたらない。ここで汪喜孫がベトナム使節と交流
したことを示す史料として紹介するのは、ベトナム人范芝香の『鄜川使

³⁾ 拙稿「朝鮮燕行使申在植の『筆譚』に見える漢学・宋学論議とその周辺」（岩
井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都、京都大学人文科学研究所、2004、
所収）。

程詩集』である。これはベトナム阮朝が北京に派遣した使節の一人、范芝香が中国を旅したときに書き残した詩集である。筆者は2003年の12月、ベトナム・ハノイへ資料調査に赴き、同行の研究者とともにハノイ国家大学を訪れ、受入れ機関の好意によって未整理であるとして紹介された資料群を調査中に、偶然に汪喜孫を^{あぎな}字で記した「汪孟慈」の三字を見出し、驚いた。本稿ではこの范芝香『鄱川使程詩集』を紹介しつつ、范芝香と汪喜孫の間に贈答された数篇の詩をも取りあげ、これまでに知られていない汪喜孫の一面について考察することにしたい。

二

ハノイ国家大学の未整理資料室に蔵する范芝香『鄱川使程詩集』は、タテ18.5cm×ヨコ13cmの鈔本である。46葉からなる。巻頭第1行に「鄱川使程詩集」と墨筆によって記され、その下に紫筆にて「范芝香先生」と書かれる。范芝香先生という紫筆は、本文中の朱点とともに本人ではなく後人が記したものと考えられ、これだけではこの書の撰者が范芝香であるとは定められない。しかし後述する根拠によって、この書の撰者が范芝香であることは疑いを容れないから、ここでは彼の撰であるとして叙述を進めることにする。なお『越南漢喃文献目録提要』によれば越南漢喃研究院図書館にも范芝香の撰として同書の鈔本を蔵するが、未見である⁴⁾。

范芝香については、『大南正編列伝二集』に伝がある⁵⁾。これによれば、范芝香は字は士南、海陽唐安の人である。1828年（道光8年、阮朝明命9年）、郷試に合格し官界入りしている。紹治（1841年～1847年）の始めに翰林院侍読学士となり、史館編修に充てられている。1845年（道光25年、紹治5年）に鴻臚寺卿に改められ、この年、如燕副使に充てられたという。これまた結論を先に言えば、『鄱川使程詩集』が書かれたのは、この時のことである。

⁴⁾ 『越南漢喃文献目録提要』（台北、中央研究院中国文哲研究所、2002）頁758。

⁵⁾ 『大南正編列伝二集』巻29（『大南寔録』20、東京、慶應義塾大学言語文化研究所、1981、頁7925）。

ベトナム阮朝では、清朝北京に赴く使節団のことを「如清使部」と称した。4年に1回派遣されるのが通例であり、その目的は慶賀（お祝い）・請封（冊封の請求）・謝恩・進香（弔問）などである。その正使を「如清正使」、その副使を「如清副使」と呼ぶ⁶⁾。如清副使には2人が充てられ、1人を如燕甲副使、別の1人を如清乙副使と呼んだ。如清の如とは「行く」こと、すなわち如清とは清朝へ行くことを意味する。如清使部のことを雅名で「如燕使部」とも呼ぶ。燕が北京の雅名であることは言うまでもなく、まさしく中朝関係史で言う燕行使である。『大南正編列伝二集』の范芝香伝で「如燕副使に充てられた」と記されるのもこのためである。

さて、范芝香は清朝から帰国したのち礼部左侍郎などの官を歴任、そして1852年（咸豊2年、嗣徳5年）には今度は如清正使（如燕正使）として、再び北京に使いしている。彼が死去したのは1871年（同治10年、嗣徳24年）、時に67歳であった。著書として『星軺初集』『星軺二集』があるという。あるいはこの『鄴川使程詩集』こそ、『星軺初集』にあたるのかも知れない。

『鄴川使程詩集』には、明確な如清つまり燕行の年代をどこにも記さない。しかしこのたびの北京旅行が、1845年（道光25年、紹治5年）の翌年元旦に北京紫禁城の太和殿で行われる正朝の儀に参列するためのものであったことは、彼が北京で朝鮮燕行使の李裕元と会い、「贈朝鮮書状李学士裕元題扇」と題する詩を作って贈っていることから明らかである。李裕元は2度にわたって燕行しているが、書状官として行ったのは、1845年（道光25年、憲宗11年）にほかならない⁷⁾。そこで『欽定大南

⁶⁾ 『欽定大南会典事例』巻128、礼部60、邦交、遣使事宜。

凡如清、例四年遣使一次、如遇有慶賀・請封・謝恩・進香諸礼、奉有遣使。……其請封使部正使用二品官、甲乙副使用三四品官。

如清使部、如清正使、如清副使の名称は、この史料に多数見られる。

⁷⁾ 『同文彙考補編』巻7、使行録（『同文彙考』〔韓国史料叢書第24、ソウル、国史編纂委員会、1978〕頁1737。李裕元の2度の燕行については、拙稿「日本現存朝鮮燕行録解題」（『京都大学文学部紀要』第42号、2003）頁220、参照。下に范芝香が李裕元にこの時贈った詩を記す。なお、李裕元『嘉梧叢略』（『韓国歴代文集叢書』所収本〔ソウル、景仁文化社、1997〕）には、この范芝香との邂逅についての記録を一切とどめない。

贈朝鮮書状李学士裕元題扇

会典事例』巻 128、邦交、に記す派遣記録を当たってみると、紹治 5 年のところに「礼部右侍郎張好合、鴻臚寺卿范芝香、侍講学士王有光を謝恩使部の正・副使に充てた」とある。また『鄴川使程詩集』では正使（大陪臣礼部侍郎張亮軒）および乙副使（三陪臣侍読学士王濟齋）と贈答唱和した詩があることから、この詩集の作者は、3 人の正・副使からこの 2 人を除いた如清甲副使であることが知られる。この 3 点によって、詩集の撰者は范芝香にほかならぬことが、はじめて確定できるのである。

さて『鄴川使程詩集』によれば、この如清使は 1845 年（道光 25 年、紹治 5 年）初秋つまり 7 月にベトナムと清との国境に位置する鎮南関に入り、広西省太平府、桂林府、湖南省長沙府、湖北省漢陽県、河南省偃師県、河北省邯鄲県のルートをたどり、年末に保和殿の宴に列席、翌年元旦に太和殿でとりおこなわれた正朝に列席、さらに元宵（正月 15 日）の翌日に円明園で催された宴に出席している⁸⁾。北京を離れたのがいつの頃かは定かでないが、帰路の河北省保定府を過ぎるところで「春風半なんなに垂んとして草初めて萌ゆ（春風垂半草初萌）」と歌い、河北省邯鄲県を過ぎるところで「緑柳枝低く（緑柳枝低紫柏平）」と歌うから、これらの地を過ぎたのは 2 月あるいは 3 月と考えてよいであろう。問題の汪喜孫と詩の贈答がなされるのは、河南省に入ってからのものである。後に見るように范芝香が汪喜孫に贈った詩の一つに「潁川三月の雨、春色街頭に満つ」という句があるので、河南省のほぼ中央を北西から南東に向けて流れる潁河を渡ったのは、晩春 3 月であったと考えられる。長江東

使星高照海雲東、王会衣冠萬里通、望国英華瞻彩鳳、上都春色起賓鴻、儒書不為重溟隔、声氣遙知率土同、相別可能相憶否、片懷聊寄月明中。

⁸⁾ 『清代起居注冊 道光朝』（国立故宫博物院蔵、台北、国学文献館、1985、第 81 冊、頁 047004）道光 25 年 12 月 26 日の条では、朝鮮燕行使については朝鮮国正使李憲球、副使李同淳、書状官李裕元とその名がそれぞれ記されるが、ベトナム如清使については、「越南国陪臣張好合等三人、入覲於神武門外、跪迎聖駕。」と記すのみで、范芝香の名は見えない。12 月 29 日に保和殿で催された宴、道光 26 年正月元旦に太和殿で行われた儀式、正月 2 日に紫光閣で催された宴、正月 16 日に円明園正大光明殿で催された宴の記事でも、それぞれ越南国陪臣張好合とのみ見え、范芝香の名は見えない。しかし太和殿の儀と保和殿、紫光閣、正大光明殿の宴、すべてに范芝香が出席したことは、彼の詩集から見て確実である。

岸の武昌にそびえ立つ黄鶴楼を再び仰ぎ見たときも、「三月の暮」と歌う。その後も往路を戻り、少なくとも広西省南寧府に帰着したところまでは確認できる。ハノイ国家大学所蔵本では、詩集は清朝国内で作った詩で終わっている。すなわち、汪喜孫がベトナムから来朝した范芝香と交わったのは、清朝の年号で言えば、道光 26 年（1846 年）3 月のことである。あるいは最もひろく幅をとっても、この年の 2 月から 3 月にかけてのことであったとして、誤りない。

三

次に『鄱川使程詩集』に載せるところの、范芝香が汪喜孫に贈った詩、および汪喜孫が范芝香に贈った詩を掲げる。行論の都合上、范芝香が作った詩には A・B・C などの記号を加える。このうち C から G はすべてまず汪喜孫が范芝香に与えた詩に対し、これに答えた次韻詩である。C'・D'・E' などとしたのは、汪喜孫が先に与えた詩であるから、本来 C'-C、D'-D という順序であるが、史料に記載された順序に従ってここでは記す。〔 〕を付した部分は、史料原典では双行になっているところである。なお下記の詩のうち「清明」の 1 首は汪喜孫と直接の関係を持たないが、范芝香が彼と同行の途次で作ったものに違いないから、参考のため記す。

題懷慶太守汪孟慈清明栽藕圖

〔太守江都人、姓汪名喜荀、河南省派委送使、途間相与款洽、因出手卷図軸、請題。图中絵尽先君塋域、左右湖山、松柏蒼翠、前有蓮池、乃祭墓時所栽植、名曰清明栽藕図。〕

- A 佳城君子宅、春雨蓮花塘、君子有潜徳、蓮花宜遠香、柔懐新隴表、手澤旧楹蔵、雲天宦遊侶、对此同悲傷。
- B 襟帯湖山共宛然、分明佳兆卜牛眠、地靈已長千尋柏、新雨宜栽十丈蓮、世徳遺芳青簡裡、子心揮淚白雲辺、維桑与梓同瞻仰、孝若碑銘信可伝。

次韻酬答汪太守孟慈四首

- C 矯矯懷州守、英標自夙成、江山此跋履、膂力方經營、星斗樽前落、風雲筆下生、不才天外客、詩社感同盟。
- C' [孟慈原東。 虛名匪實学、文行兩無成、細效当年事、徒勞百歲嘗、此心合千古、何事慰平生、行路非恒久、常懷車笠盟。]
- D 穎川三月雨、春色滿枝頭、鳥語花林暮、人還桂嶺秋、雲路懷聯轡、詩城愧礪矛、經綸本忠孝、持此慰康侯。
- D' [原東。 忠孝平生志、詩書慰白頭、客何來万里、我亦自千秋、晨起思題桂、夜眠莫枕矛、立功今廿載、命蹇不封侯。]
- E 卓然声績讓誰尤、五馬門高雨露稠、東壁圖書相与暇、春垣鴻雁不知愁、礼文自信通重譯、声氣何嘗限九州、冠蓋明朝各岐路、綠波江浦幾回頭。
- E' [原東。 不是歸程阻石尤、回車猶恋主思稠、九霄雨露由天降、十道烟花滿地愁、何日從征忝上賞、即看奉使出中州、皇華四牡留嘉什、我亦題詩最上頭。]
- F 近從偃邑聞佳唱、共識江都富綺辭、蘭室有香偏耐久、陽春難和莫嗔遲、天空雁字題雲錦、日煖鶯梭織柳絲、独有閩河未歸客、曉鍾斜月倚欄時。
- F' [原東。 聞道使車題驛壁、伝来王建有新辭、五言詩墨長城在、万里閩山歸訊遲、紅杏花殘春寂々、楊柳鞭影雨絲々、宦遊独有懷州守、臨水登山送客時。]

次韻答汪太守贈別

- G 綠樹青山遠送人、輕風紫陌惹香塵、陽春一唱離亭曉、散入梅花別樣新。
- G' [原贈。 風々雨々送行人、客舍青々雨浥塵、不是陽關三弄笛、確殘城外柳初新。]

清明

隔歲征軺三月天、申陽道上策吟鞭、曉鶯啼破千山霧、新雨吹斜万井烟、中酒客閑催踴蹶、折花人倦倚鞦韆、近来詩瘦知多少、郷国韶華

又一年。

留別汪太守孟慈

H 周原冠蓋遠將相、海內論交識大方、詩伯樽前散珠玉、鄴侯架上出縑
緗〔臨別時、太守以汪氏家書一部見贈、故云〕、百年鴻孤人南北、一
曲驪駒柳短長、日暮征車回首望、春山無數樹蒼々。

さて、これらの詩は、我々に何を伝えるであろうか。まず、ベトナム阮朝の范芝香にとって、その中国旅行のなかで汪喜孫との出会いあるいは彼との詩の贈答はどのような重みがあったかを考え、次に中国清朝の汪喜孫にとって、范芝香との贈答詩はどのような状況のなかで作られたのか、どのような内容なのかを検討したい。

まず、范芝香にとって汪喜孫はどのような存在であったのか。『鄱川使程詩集』によれば、彼はこのたびの中国旅行中に、合計5人の清人に対して詩を作り贈っている。このうち往路の湖北省漢陽で、おそらくは偶然に知り合った挙人の張聯璧（字号は次微）に対しては往路で1首、復路で8首を贈っている⁹⁾。この民間人と言うべき挙人の張聯璧を除き、あとの4人はすべて汪喜孫をも含めてベトナム如清使をその途次で接待した地方官であった。まず1人目は、広西省太平府知府の呉徳徴（宣三）である。太平府知府は鎮南関を越えてきたベトナム如清使がまず入る府城に駐在する官僚であり、かつまた中国各省のうちでベトナムと最も関係が深かった広西省に対してベトナムから文書を送付してきた場合、まずこれを取り次いだ地方官でもあった¹⁰⁾。したがってベトナムからの使節が太平府知府と詩の贈答をするのは、極めて当然であると言いうる。

次に2人目が、賈石堂という人物である。彼には、湖南省長沙府城か

⁹⁾ 復路で作った詩に付せられた自註によれば、張聯璧是北京から帰ってくる予定の范芝香を久しく漢陽のあたりで待っていたが、遇えなかったために先に黄州へ帰った。この時、范芝香のために送別の詩8首を作りこれを留め置いてくれたので、范芝香は次韻詩8首をもってこれに答えた。

¹⁰⁾ 『欽定大南會典事例』卷128、礼部、邦交、投遞文書。

凡投遞清国広西省公文、均由諒省具文、交清国太平府認辦。

なお、広東省へ送る公文は、広東省欽州府が取り次いだ。

ら湘江をさらに下り、屈原が水死したと伝えられる汨羅を過ぎたあたりで歌った「次韻答謝江州賈大人石堂」と、「江州賈大人以詩集見畧、再成一律寄謝」の2首を寄せている。彼の名は復路の広西省南寧府に帰ったところで贈った「贈別江州賈石堂〔石堂至南寧告別。且以試闈硃卷見贈〕」でも、再び出てくる¹¹⁾。この賈石堂なる人物がいかなる職を持った人物であったかを説明するためには、この詩の一つ前に置かれる「長送泗城知府劉銘之〔大烈〕惠贈對聯詩扇、走筆答謝二律」で見える劉大烈がいかなる人物であったかとともに、清朝がとったベトナム使節迎送の方式を説明する必要がある。

『欽定大清會典事例』の規定によれば、各国から朝貢のために北京にやってくる使節には「迎送官」と呼ぶ伴送する者が付けられる。その目的は使節を警護するとともに、旅程で不都合なことがないように様々な差配をふるうことである。ベトナム使節に対しては、国境の広西省から伴送をはじめ、北京で折り返し広西省に戻ってくるまで、全行程をとにもする「長送」（長行伴送）が付けられる。そしてさらに使節一行が経由する省では、各省ごとに迎送官がリレー式に付せられる。一行の全旅程を迎送する長送に対して、この省単位で迎送する官を「短送」と呼んだ¹²⁾。

すなわち「長送」泗城府知府の劉大烈とは、全行程の随員として伴送する任にあった人物であり、本来の職は広西省泗城府知府であったのである。この長送には広西省の官僚がなることが通例であったが、はっきりそのように決まっているわけではなく、また知府と定まっているわけではない。たとえば1803年（嘉慶8年）の長送は広東省雷瓊道の道員

¹¹⁾ 本文で「試闈」と記したところ、原典では「試圍」と作る。誤写と考え、このように記した。

¹²⁾ 『欽定大清會典事例』卷510、礼部、朝貢、迎送（台北、新文豊出版社公司、1976、頁11848）。

乾隆三十六年議准。……又諭、……嗣後各省貢使到境、該撫即於同知通判中、遴委一員、應用武弁者、並酌派守備一員、長行伴送至京、俾沿途照料彈壓、並一面知照經過各省、予行添派委員、護送續行、按省更替、庶不致委員逾省、呼応不靈。其回國時、仍令原派員長送、經過各省、亦仍委委員、護送出境。

短送の名称は、裴文禎『万里行吟』に見える。

であった¹³⁾。ちなみに、同様なベトナム如清使であった裴文禛が、1876年（光緒2年、嗣徳29年）から翌年にかけての旅程で作った詩を収める『万里行吟』によれば、この時長送に当たったのは倪懋礼という人物であり、拳人で出仕しこの時は広西補用道であった¹⁴⁾。賈石堂には一切地方官としての片書きは見えない。江州とは広西省太平府土江州であることは疑いない。「次韻答謝江州賈大人石堂」に付せられた賈石堂の詩で、「船をつら聯ね万里するは前因なるを悟る。……長安にて同じく太平の春を詠わん（聯舟万里悟前因、……長安同詠太平春）」と言う。これは彼が范芝香一行と万里をともし、同じく北京に到着する予定であることを述べたものである。この詩が湖南省汨羅を過ぎたところで作られたことから考えても、彼もまた長送の一員であり、しかも官職の記されないところからすれば、かなり官位の低い長送随員であったとするのが至当であろう。すなわち、范芝香がその詩集に収めた贈答詩を交した4人の迎送官のうち、2人は長送であり、広西省から長旅にこれから出発し、再び広西省に戻る数千キロメートルで苦勞をともした者たちであったから、彼らに詩を贈答したのは、当然すぎるほど当然であった。

汪喜孫とは、4人の清朝地方官のうち、以上述べた3人を除いた者にほかならない。彼は上に掲げた引用文の2行目の〔 〕に見られるように、「河南省が派委し使節を送らしめた」官僚、すなわち短送であったのである。短送は各省ごとに派遣され、リレー方式でベトナム使節を送るのが任務であったから、一行の通路にあたる広西省、湖南省、湖北省、河南省、河北省それぞれで派遣したはずである。とすれば、往路と復路を各省別々に派遣したとすれば計10人、かりに往路、復路全て同一人物を派遣したと仮定しても、最少で5人である。ちなみに『万里行吟』では、裴文禛は少なくとも往路の湖南省、湖北省、河南省で派遣された短送と詩を交わしている。

范芝香にとって汪喜孫とは、各省で数多く伴送したはずの短送のうちで、ただ唯一、詩を交わした人物、少なくとも唯一、その交した詩を自らの詩集に載せるに価する人物であった。しかも、上に掲げたように汪

¹³⁾ 同前書、頁11849。

¹⁴⁾ 裴文禛『万里行吟』（東洋文庫蔵）巻1、小泊画眉塘和倪心畊（懋礼）觀察元韻。

喜孫に与えた詩は、すべてで8首にのぼる。これに匹敵するのは民間人の拳人張聯壁に与えた9首があるだけであるが、このうち8首は張聯壁が漢陽のあたりで范芝香が帰ってくるのを待って待ちかね、8首の詩を作って留め送別としたものに次韻したものであるから、比較の対象とはならない。すなわち范芝香にとって汪喜孫は、彼が詩を交わした中国知識人の中では特別中の特別な人物だったのである。

汪喜孫は上記「題懷慶太守汪孟慈清明裁藕圖」および自註に見えるように、このとき河南省懷慶府知府であり、河南省派遣の短送として范芝香らに随行した。彼が河南省のどこからどこまで迎送したのか明らかではないが、Hの留別の詩の次が河南省南部の確山県に至る前に作った詩であることから、河南省の短送を担当したとはいえ、北の省境で出迎え南の省境で送別するというように全行程にピッタリ付いたものではなかったことは明らかである。

汪喜孫が正式に河南省懷慶府知府となったのは1845年（道光25年）2月のことであるが、実はその6年前の1839年（道光19年）からすでに河南省に赴き、黄河の補修などを行っていた。彼が河南省で行った治績は、なんと言ってもこの河工であった。特に1844年（道光24年）から当たった堤防工事においては、この年の秋から翌年の春まで現場で小屋掛けの生活を送り、地に席して寝泊まりしたために湿気を受け、これ以後は毎年夏に脚気に苦しむこととなった。1847年（道光27年）夏には風邪をわずらい、口元からヨダレが流れ、左手は麻痺するにいたった。この年、夏になると出てくる脚気に苦しみながら、しかし水害旱害に苦しむ治下の民を見捨てるわけにはいかないと、子供が制止するものもふりきって社稷を祀りに自ら出かけたのは、この年の8月2日、この無理がたたって死去したのは翌8月3日であった。時に62歳であったという¹⁵⁾。

汪喜孫が范芝香らベトナム如清使使節を迎送したのは、すでに述べたとおり1846年（道光26年）3月頃のことであった。当時、黄河は極めて危険な状態にあり、彼は1845年（道光25年）2月に懷慶府知府となつてから状況を視察して回り、翌年4月からは大規模な河川工事に入り、その現場監督に当たっている。すなわち范芝香と交わった1846年（道

¹⁵⁾ 前註 2) 著作集、頁1282～1291。

光 26 年) 3 月とはその直前であり、しかも彼を毎年夏に苦しめた脚気が、いまだ現れないうらかな春 3 月のことであった。それは堤防工事に明け暮れた彼の地方官時代にあって、たまたま訪れた比較的平穏な一時であったのである。汪喜孫はこの時 61 歳、一方の范芝香は 42 歳であった。この状況を念頭に置いて、再び 2 人の詩を見直してみよう。

まず汪喜孫は恐らく随行をしばらくした後、頃を見はからって「清明栽藕図」を取り出し、范芝香に題詩を願った。清明とは言うまでもなく春の墓参り、墓掃除をする季節、その墓とは言うまでもなく父汪中のものである。その父の墓にかかわる絵図に題字を請うたところに、「孝子」汪喜孫の面目躍如たるものがある。彼が作った父にかかわる絵図として、これまで知られているものの一つは「礼堂授経図」である。汪喜孫は子供の時から父に経文読解の手ほどきを受け、これをその自撰年譜でも記し、さらに今は亡き父への思いを込めて「礼堂授経図」を作り、多くの知人に題文、題詩を請うて贈られている¹⁶⁾。劉逢禄「礼堂授経図記」によれば、汪中の死(乾隆 59 年=1794)から 18 年後にこの図記を汪喜孫から依頼されたというから、おそくとも 1812 年(嘉慶 17 年)には、「礼堂授経図」が作られていたことになる。また自撰年譜によれば、1813 年(嘉慶 18 年)に呉慈鶴が「授経図譜」を作ってくれたというから、これが同じものとするれば、この年までには作られていたことになる。さらに、これとは別に「伝経図」というものがあり、やはり父汪中の遺徳を顕彰するものであったという。阮元「伝経図記」は 1828 年(道光 8 年)に書かれているから、「伝経図」そのものも、遅くともこの年以前に作られていたことになる¹⁷⁾。「礼堂授経図記」「伝経図」とはおそらくは別の「受経図」なるものがあつたようであるが、その製作年代はよくわからない¹⁸⁾。「清明栽藕図」はこれまで知られていなかったものである。北京大学図書館には汪喜孫自筆稿本の詩集『抱璞齋詩集』を蔵する。これには 1842 年(道光 22 年)までに作った詩を収めているから、范芝香と邂逅したちょうど 4 年前までであるが、この書の中にも「清明栽藕図」

¹⁶⁾ 同前書、頁 1016~1022、劉逢禄撰「礼堂授経図記」等。また頁 1178 以下、汪荀叔自撰年譜。

¹⁷⁾ 同前書、頁 1325。

¹⁸⁾ 同前書、頁 1326。

にかかわる詩や記事などは含まれない¹⁹⁾。と言うことは、汪喜孫が60歳前後になってなお、父をしのぶ絵図をまた自ら作ったと考えるべきであろう。そして、あえて異国の文人にこれに題詩を書いてくれるよう依頼したことになろう。それは、彼の死の前年のことであった。

次に注目すべきは、C-C'の詩の贈答である。この2つの詩によって、汪喜孫が河川工事で駆けまわっており、悪戦苦闘していた当時の自らの様をおそらくは范芝香に話していたことがうかがわれる。「江山をここに跋履し、膂力もて方に経営す」すなわち「山河を跋渉し、渾身の力で事に当たっている」とは、これを示すに違いない。彼が河川工事に渾身の力をふりしぼっていた事は、どうやら当時有名なことであった。だからこそ汪喜孫みずから「虚名にして実学に非ず。文も行も尙つながら成るなし」と謙遜するのである。しかし我々はこの言葉からむしろ逆に、地方官として業務に励む汪喜孫の自負を読みとるべきであろう。それにしても、「細かなる效なり当年の事、徒勞なり百歳の営み」とは、あまりに暗くまた大げさな表現であり、さらに「此の心、千古に合わば」との表現は、一層大げさに見える。しかしこれが恐らくは死を翌年にひかえた汪喜孫自身の実感であったと考えるべきである。また一人汪喜孫をこえた老い先短い一地方官が、現場でその心の内を吐露した言葉として、言いかえれば自らの営みを千古の歴史の中のささやかな営みの一つとして位置づけつつ、黄河の堤防工事にあたっていた者が当時もいた証しとして、きわめて興味深い。この詩が、一人の外国人に与えた歌であった点でも興味深い。外国人に対し、「実学」「文・行」「此心合千古」などと、実に気まじめなことを言っている点、汪喜孫その人をしのばせるが、なかでも「此心合千古」の句は、かつて汪喜孫が42歳の時に朝鮮の申在植に対して、自分は閔帝廟や城隍廟に「不正があれば、雷よ、我が身を打て、火よ、我が家を焼け」と祷ったことがあると信条告白していたことを想起させる。

D-D'の贈答詩も、あまりにまじめで暗い。C'-Cにおいて、辛い地方官としての仕事は、このような詩をもととした友人を得て慰められるのではないかと、としていたが、D'では「忠と孝とは平生よりの志」である、とより直截に気まじめな表現をとる。このように太平のなか詩を詠

¹⁹⁾ 同前書、頁246～370。

うのみで干戈を交える戦争がない、したがって「功を立つること今や二十歳（載）なるも、命蹙て侯に封ぜられず」と自嘲ぎみにいう。汪喜孫と范芝香が旅をともにした河南省は、まさしく「中原に鹿を逐う」の地であり、ルートに数多くの古戦場があるから、恐らくは戦争によって「王侯に封ぜられる」などといった大時代な表現がなされたのであろう。またジョークの感覚もあったに違いない。しかし結果として、范芝香をして「経綸は忠孝に本づく、此を持たば康侯たるを慰めん」と言わしめているのである。汪喜孫は進士出身ではなく挙人出身者であった。ここに我々は、汪喜孫にも抑えがたい自己への処遇への不満、現在置かれる地位に対する不平があったこと、簡単に言えば「自分は恵まれていない」との不満感を持っていたことを読みとってよいのではないか。

最後に汪喜孫は范芝香に「汪氏家書」一部を贈っている。ここに言う「汪氏家書」が具体的にどのような書物であったか定かではない。しかし『孤児篇』『汪氏学行記』あるいは『汪氏叢書』など、汪氏にかかわるものであった可能性が最も大きいであろう。汪中の『述学』であった可能性もある。藤塚鄰は、汪喜孫が『述学』『先儒林年譜（汪中年譜）』『寿母小記』『孟慈自訂年譜』『尚友記』を朝鮮の金正喜に贈っていたことを明らかにしている²⁰⁾。また申在植『筆譚』によれば、汪喜孫は汪中の『述学』を贈りたいと申しで、さらに汪中の墨跡と自家の文集数冊を示し、これらに題文を記してくれるよう、求めている²¹⁾。かりにここで言う「汪氏家書」が父の汪中の著書、あるいは汪氏に関わる書物であるとするなら、彼が父汪中ならびに汪氏に関わる著作を朝鮮のみならず、同様な外国、つまり越南にまで機会をとらえて宣伝しようとしていたことを示す事例であると言ってよい。

²⁰⁾ 前註 1) 藤塚著書、頁 410～416。

²¹⁾ 申在植『筆譚』丁亥（道光七年）正月九日。

甘泉（汪喜孫）曰、先君述学一冊、又此奉贈。

同書、正月二十一日。

甘泉出示其先君墨跡及自家文集数冊、曰願求先生題數語耳。

四

以上、1846年（道光26年、紹治6年）にベトナムの范芝香と中国清の汪喜孫の間で、つかの間ではあったが交流があったことを紹介し、彼らが書き残した詩文に即して汪喜孫の言動を追った。ここで最後に残る問題は、河南省でベトナム使節を迎送する任務、つまり短送の任務がなぜ汪喜孫に委ねられたのか、それは全くの偶然、アトランダムな選択によったのかどうか、という問題である。

すでに見たように『欽定大清会典事例』に見える規定では、省レベルの迎送官を誰にするかの選択は、当省の巡撫に委ねられていた。しかし規定によれば、迎送官には同知・通判の中から選択することになっていたにもかかわらず、汪喜孫の場合はこれらより一ランクあるいは二ランク高い知府であった。また清朝道光20年代といえば、地方官の限りある定員数に対して、実際に官僚となりうる資格を持つ者はあふれかえり、各省巡撫はその配下に定まった任務を持たずに定員空きを候っている官僚を多数抱えていた。これを候補人員と呼ぶ。現地河南省省城の開封府にも、正式な空きポストが出ることを候っていた官僚が多数いたはずである。時代はやや下るが、裴文禔『万里行吟』に見える湖南省短送に充てられた盛慶紘は、「進士に挙げられながら今に至るまで18年、補用道銜即補知府であり、なお実缺（実際のポスト）を得ていない」人物であった²²⁾。また湖北省短送に充てられた楊恩寿も、舉人出身で塩運使銜という肩書きを持つに過ぎぬ者であった²³⁾。河南省でも実際のポストに就けぬいわゆる候補人員はあふれていたと考えられるから、巡撫としては彼らに臨時の仕事を与えてやればよいのであって、何も60歳を過ぎてしばしば身体に失調を訴える汪喜孫をわざわざ選択し、懷慶府城から遠いところまで出張を命ずることはないのである。

なぜ汪喜孫が選ばれたのかに対しては、確証は示せないにしても、お

²²⁾ 前註14)巻2、留別盛錫吾觀察、の自註。

錫吾舉進士、至今十八年、補用道銜即補知府、尚未得実缺。

²³⁾ 同前書、巻1、次韻楊蓬海（思寿）都軫相見之作、の自註。

蓬海（長沙人、舉人、歷陞塩運使銜、充湖北短送）。

およその推測は可能である。それは、恐らくは第一に、汪喜孫が知府レベルの地方官としては異例なほどに文名が知られていたからであり、さらに憶測が許されるとするなら、第二に彼に朝鮮燕行使たちと親密な交際があることが、知られていたからである。「海外墨縁」が汪喜孫と朝鮮知識人との間で交わされた学術にかかわる問答集であること、すでに述べたが、これを自著の『鏗不舍齋文集』に収録した李祖望は、「海外墨縁」に対して 1845 年（道光 25 年）5 月に自序を書いている²⁴⁾。それは汪喜孫が短送迎送官に充てられたほぼ 1 年前のことである。つまり、李祖望がこの時に自序を書いていることは、この頃に「海外墨縁」が読まれていたことを示すものであり、かつまた汪喜孫が外国人と親密な交際をしていたことが、一部ではあれこの頃に知られていたことを示している。このこと、つまり汪喜孫が当時では稀な「国際人」であるとして知られていたことこそが、この 60 歳を超えた病身の老人に、ベトナム使節迎送官という白羽の矢が当たった原因であった、と思われるのである。

（京都大学大学院文学研究科教授）

【附記】

本稿は 2003 年 12 月に一緒にベトナム訪問をした伍躍、岡本弘道、デイビッド・ロビンソン、中砂明德、矢野正隆の各氏（あいうえお順）、ベトナム留学中の岡田雅志氏、および我々を助けていただき、様々なお世話をくださったハノイ国家大学 (Vietnam National University, Hanoi) の関係者の協力をえて書いたものである。この場をかりて、心より感謝の気持ちを表したい。

²⁴⁾ 前註 2) 著作集、頁 1224。